

目次	1	三井不動産寄附講座 ERES 公開フォーラム2010「我が国の持続的成長を牽引する社会資本整備と資金調達手法の多様化」
	2	研究室の窓から [小野太一先生]
	3	学生インタビュー [吉田充さん]
	4	国際シンポジウム「国際エネルギー市場の展望と課題」開催 / トピックス

三井不動産寄附講座 ERES 公開フォーラム2010

「我が国の持続的成長を牽引する社会資本整備と資金調達手法の多様化」

特任教授 内藤伸浩

2010年10月19日、安田講堂において、ERES公開フォーラム2010「我が国の持続的成長を牽引する社会資本整備と資金調達手法の多様化」(後援：国土交通省、社団法人不動産証券化協会)が、約800人の参加者を集めて開催されました。本フォーラムは、三井不動産寄附講座「不動産証券化の明日を拓く(Envisioning Real Estate Securitization)」の研究・交流活動の一環として行われたものであり、行政、不動産、建設・プラント、金融、コンサルタント、大学など多方面の実務家や研究者が参集しました。

深刻な財政危機と膨大なインフラ整備・更新需要を背景に、政府は社会資本整備に「民間の知恵と資金」の活用を図ろうとしています。そこで証券化やインフラファンド等多様な資金調達手法の導入により、公民連携の幅を広げつつ我が国の持続的成長を牽引するプロジェクトに多彩な資金を呼び込むとともに、公有資産を効果的効率的に運営管理する方策をめぐり産官学の有識者が幅広い議論を展開しました。

プログラムと講演者は以下のとおりです。講演記録や資料を<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/ERES/index.html>で公開していますので、ぜひご覧ください。



竹歳誠氏
国土交通事務次官



岩沙弘道氏
三井不動産株式会社 代表取締役社長



増田寛也客員教授
野村総合研究所顧問、前岩手県知事、元総務大臣



- ◆ 主催者挨拶：金本良嗣教授
- ◆ 来賓挨拶：竹歳誠氏 (国土交通事務次官)
- ◆ 寄附講座紹介
 - ・ 特別講演「不動産証券化と我が国の持続的成長につながる都市戦略」
：岩沙弘道氏 (三井不動産株式会社 代表取締役社長)
 - ・ 活動紹介：内藤伸浩特任教授
- ◆ 基調講演「地方分権改革のゆくえと行財政の自立と規律」
：増田寛也客員教授 (野村総合研究所顧問、前岩手県知事、元総務大臣)
- ◆ パネルディスカッション
「財政危機における社会インフラ整備と自治体・地域・市民の役割」
(パネリスト)・森雅志氏 (富山市長)・上山信一氏 (慶応大学教授)
・ 福田隆之氏 (野村総合研究所主任研究員)・尾崎昌利氏 (三井不動産株式会社執行役員)
(コーディネーター)・中川雅之特任教授 (日本大学教授)

研究室の窓から



教授
小野太一

ヴィッセル神戸が昨年のJ1最終節12月4日に4対0で勝利し、逆転でJ1残留を決めた。私が2年間出向し、医療や介護の政策を考える上で原点となった地、兵庫県神戸のチームだ。

シーズン中盤に監督が更迭され、新たな監督が就任してもなかなか勝てなかった。報道によると、チームの雰囲気が変わった契機は10月末、選手が自主的に機会を設け、注文を言い合い、思いの丈をぶつけたミーティングにあった。「仲良しクラブじゃあかん」「お前、もっと走れや」など厳しい言葉を涙を流しながら言い合うことで団結心が高まったと伝えられる。その後最終節までの7試合、4勝3分と負けなしで突き進んだ。

これを聞いて、厳しく注文を付け合うことの重要性を改めて思った。考えを容赦なくぶつけ合うことで相互理解が高まる。そのやりとりを周囲の仲間が共有することで、自省と共通の理解が生まれて個々人が寛容するとともに、1+1を2以上の力に変えるチームの力が生まれたのだろう。分裂を恐れて価値観をぶつけ合わないままでは、説得力を持ったエネルギーは生まれず、全員を巻き込んだ成果はもたらされない。

同時にチームの仲間という強い意識が大前提にあったのだろう。厳しい言葉を浴びせる相手も、自らを律し、価値観やコミットメントを共有していると信じられるからこそ、厳しい言葉を正の力に還元できる。価値の共有を信じられるなら、厳しい言葉に腹が立ち凹んだとしても、少し時間を置いたら冷静になり、自分を変えるモチベーションが生まれ、結果を喜び合える。芝居の稽古中のダメ出し合い、教師の説教……様々だが、言われた側は言う側の心が奈辺にあるかを付度して言葉を反芻する。単なる非難とレッテル貼り、自己正当化と嘲笑の心根が見透かされれば、心を動かされるはずがない。

ヴィッセルの4点目はチームの未来を支える十代選手のコンビネーションから生まれた。有為な若者の澆刺とした姿は将来への希望を感じさせる。GrasPPというこれ以上ない環境に身を置く幸せに日々感謝しながら、真剣に政策を学ぶ学生が巣立つ先がリスペクトに充ち溢れた、厳しい言葉を行き交わすことができる場になることを希望し、休業期間中もパソコンに向かってい

第61回公共政策セミナー

公共管理コース1年 笹井 仁

2010年11月5日、法学部4号館大会議室において、滋賀県知事の嘉田由紀子氏を講師にお迎えして第61回公共政策セミナーが開催されました。「地域主権時代における自治体の挑戦」というテーマでしたが、さらに知事のキャリアのお話まで伺うことができたのは、私達学生にとって非常に良かったと思います。

知事の人生はまさに挑戦の繰り返しでした。京都大学へ進学後アメリカへ留学、帰国後は琵琶湖博物館で研究者として活躍され、現在は滋賀県初の女性知事として様々な問題に挑戦されています。たとえ活動する場所や立場が変わっても、知事は一貫して自分の実現したい夢を持って取り組まれており、すべてのキャリアがその糧になっているのだと感じられました。

それに関連し、なかなか進まないという県政の改革について、知事は次の二点が重要だと話されました。まず、とにかく実践し、成功体験を積み重ねること、次に、実践は必ず理屈で裏付けることです。研究者としての長いキャリアを通して、実践と理屈の行き来を繰り返すことの重要性を知り、成功体験を積んでこられた知事だからこそ、県政に新たな風を吹き込むことができるのでは、と感じられるお話でした。私も滋賀県で生まれ育った人間として、誇りをもてる、より魅力的な故郷に変わることを期待するとともに、お忙しい中お越し下さった知事に改めてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。



— 内閣府に就職が決まったそうですね。

昨年、内閣府に落ちたのですが、今年は捲土重来で再挑戦して受かりました。他にも、鉄鋼などの素材メーカー、コンサルティング会社、銀行、生保といろいろな職種を受けました。お会いした方々は企業ごとの特徴があり、面白かったです。

1年次のインターン経験(霞ヶ関インターンシップ・内閣府)から、やりたい仕事があったとしても、若いうちにはそれ以外の仕事が圧倒的に多いことに加え、職務に全力投球する重要性を知りました。その場合、就職先を選ぶ際に重視するのは、誰と一緒に働くかだと思ふようになり、面接や試験で一番波長が合った内閣府に決めました。もちろん、業務内容で最も興味を持ったのも内閣府だったのですが(笑)。

仕事に必要な基礎はこの大学院で学べたと思っています。文章の書き方や情報ツールの入手・利用方法などの基礎中の基礎に加えて、幅広い人的ネットワークを得られました。その他にも、GraSPP、特に経済政策コースは学生の自主性を重んじており、自発的に学ぶ姿勢が身についたと思っています。専門職大学院としてのGraSPPの価値はそこではないでしょうか。授業では、金本良嗣先生の『公共政策の経済評価』や『事例研究(都市地域政策と社会資本ファイナンス)』、大橋弘先生・川本明先生の『事例研究(人材育成)』、松浦正浩先生の『交渉と合意』など面白い授業が勢揃いしていました。



学生 インタビュー

吉田 充さん
経済政策コース2年(3年目)



— 経済政策コースの学生は結束が堅い強い印象があります。

他のコースに比べて必修科目が多いからかもしれませんが、特に自習室にいる仲間とはつながりが強いと感じています。面白いことに期によって雰囲気は全く違います。例えば4期生には個性的な先輩が多く、逆に5期や6期生はのんびりした学生が多いと感じています。しかし、各期に共通する特徴もあります。互いに納得いかないことがあれば率直に議論をするというのがそのひとつです。ある先輩は「ノーガードの殴り合い」と表現していましたが、納得がいかなければ根拠を持って主張し、反論されたら真摯に受け止める姿勢の重要性を知ることができたのも、このような風土で先輩方に揉まれたからだと考えています。

— 下の世代を見ていて思うことはありますか。

大学(国際基督教大学)時代に母校の高校で教育実習をしたのですが、そのとき高校の先生から、今の時代は小学校で学ばなければいけない人間教育を中学校で行わなければならない、そのしわ寄せから中学校で学ばなければいけない社会常識や学業を高校でというようにどんどん後送りになっていて、進学率を上げるという話以前の状態と伺いました。最近は自由ばかりもてはやされているようですが、不自由を知ってこそ本当の意味での自由がわかると思います。

(インタビュー・文責 編集担当)

国際シンポジウム

「国際エネルギー市場の展望と課題」開催

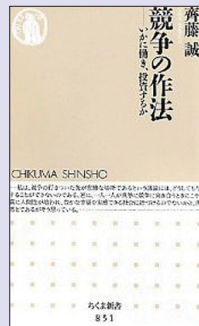
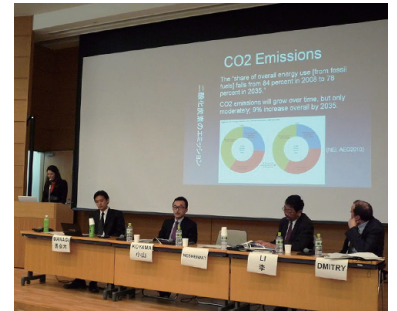
2010年11月29日、鉄門記念講堂で、標記シンポジウムが開催されました。本シンポジウムは同年4月に始まった、国際石油開発帝石(株)の寄付講座「エネルギーセキュリティと環境」の活動の一環として行われたものです。

国際石油開発帝石株式会社の黒田直樹会長からの開会挨拶に続いて行われた前経済産業事務次官の望月晴文氏の基調講演は、途上国を中心としたエネルギー需要の増大が見込まれる中、エネルギーセキュリティは、供給の安定性、価格の安定性、環境制約の克服という3つの視点で考えるべきではないか、との問題提起に始まりました。その実現には、消費側のエネルギー確保と資源国側の適正な経済発展を同時に達成することが重要であること、資源国、消費国のWIN-WINの関係構築が重要であることが指摘されました。

その後、最初のセッションでは、国際エネルギー機関(IEA)の上級アナリストである Amos Bromhead 氏から、IEA より公表された World Energy Outlook 2010 に基づき国際エネルギーの展望の紹介がありました。次のセッションでは、公共政策大学院の小山堅特任教授から、日本エネルギー経済研究所より公表されたエネルギーアウトックに基づき国際エネルギー情勢と日本についての講演がありました。日本エネルギー経済研究所 Hitachi-CFR Fellow の Julia Nesheiwat 氏、長岡技術科学大学の李志東教授、モスクワ国際関係大学の Dmitry Streltsov 教授からは、それぞれ国際エネルギー情勢と米国、中国、ロシアについての講演がありました。

様々な不確実性が存在する国際エネルギー情勢を踏まえ、今後の長期的な国際エネルギー需給を展望し、エネルギーセキュリティや環境問題等の重要な課題とその対応策を議論することを目的にした本シンポジウムには、エネルギー業界、東大関係者を中心に約200名にご参加いただきました。講演の概要は公共政策大学院のHPに掲載予定です。本シンポジウムにご参加、ご後援いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

非常勤研究員
井澤 淳
(国際石油開発株式会社)



『競争の作法』を執筆して

特任教授(一橋大学教授)
齊藤 誠

拙著では、①労働と資本を生産活動に間雲に投じることが愚行であること、②生産現場で切磋琢磨しながら労働と資本を大切に活用すべきこと、③生産活動から解放された労働と資本を家族や地域の活動に活かすことについて書いています。逆説的に響くかもしれませんが、私達が過酷な国際競争の中で生き延びていくためには、容赦ない競争結果を静かに受け止められる豊かな場所を生産現場の外側に持っていなければならないように思います。

GraSPP ホームカミングデー開催(2010年11月13日) 公共政策コース2年 小俣 岳



今年度のホームカミングデーも、活気と和やかさがうまく混ざり合った1日でした。様々な分野の第一線で活躍中の修了生と現役生をつなぐ「キャリアデザインセミナー」の時間中、活気が満ち溢れていました。いっぽう懇親会は、笑顔に美味しいお料理に心も胃袋も大いに満たされ、終始和やかさ溢れる会でした。ご参加頂いた全ての皆様に感謝しつつ、大学院でできた人のつながりに改めて大切にしたいと感じた1日でした。



今回トピックスでご紹介した『競争の作法』は、経済書であると同時にきわめて優れた人生の哲学書です。競争はあくまで人生を豊かにするための手段であり、最終目的ではないということをおぼろげに悟らせてくれた一冊でした。(編集担当)

NEWSLETTER

第23号

[編集・発行] 東京大学公共政策大学院
GRADUATE SCHOOL OF PUBLIC POLICY
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[発行日] 2011年1月31日

[デザイン] 安孫子正浩(水蒸気図案室)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 tel 03-5841-1710 fax 03-5841-7877

E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp>